この部屋から、旅に出よう。 Vol.1

Platform

夢の中の図書館

station

- VRChat：言ノ葉堂
- cluster：図書Bar『Puella』
- NeosVR：Neo Library
- Real.W：BookBar『月に開く』

Platform編集部

Platform Vol.1 contents

言ノ葉堂 VRChat ……4

図書Bar『Puella』 cluster ……8

Neo Library [MMC22] NeosVR ……12

BookBar『月に開く』 Real.W ……16

あとがき ……20

第1号のテーマは「本」。

この「Platform」はブログでもウェブ記事でもなく、電子ではあるが「本」として発行する。

VR空間と本という、一見遠い存在を結びつける意義のようなものを私なりに確認してみたかったため、このテーマとした。

「本」とVRの世界へ、出発しよう。

編集長

To the next PLATFORM.

世界には、色んな町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。
……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」

写真／みくにき

仮想の書店に貴方の言葉が並ぶ

VR CHAT 言ノ葉堂

同人小説家からメタバース小説家へ

私はメタバース小説家と名乗っている。だが数年前までは、コミティアや文学フリマで同人誌を頒布する、同人小説家であった。あの頃に味わった喜怒哀楽は様々だが、あえて一つ語らせて頂くのであれば、印刷所に発注した本が届いた時だろう。あの日の興奮は、今でも鮮明に思い出せる。

50冊余りの本が入った段ボールを、開封した瞬間の濃厚な本の匂い。約200ページ分、10万文字超の重みを手に乗せた時、まだ一冊も頒布していないのに感極まった。自分が作った本が、今ここにあるという達成感。

さて、実際の頒布数はどれ程だったかと問われると……その恥ずかしさで、黙秘権を行使せずにはいられない。それでも、当時に試行錯誤を重ねて得られた経験は、VRでの活動に大いに役立っている。

やがて同人イベントを催すのが難しい時勢になり、私はVRに活動場所を移すことに決めた。しかしVRで小説家？具体的な活動方針が定まらず、最初はVRChatを彷徨っていた。そんなある日、VRC放送局で放映されたあるワールドのCM動画が、私の活動方針を決定付けた。

VRChatに存在する本屋、**言ノ葉堂**。そこではVRの住人たちが、自作の小説を本として投稿できるワールドだ。小説のみに留まらず、4コマ漫画や詩集、短歌集も投稿できる。VRで撮影した写真を『挿絵』とした本もあるし、イラストブックや（アバターの）ファッション雑誌を置くことも出来る。

「本を作る喜びを、何度でも味わえるのか！？」

感銘を受けた私は、是非ともこのワールドに本を置かせて頂きたいと考えた。

誰でも作品が投稿できる本屋

言ノ葉堂を知ってから、私は店主の**じむの朔**さん、そして言ノ葉堂を題材にした小説を執筆した。じむのさんは大いに喜んで下さり、拙作を言ノ葉堂に置いて下さった。厚みがあって、実際にページをめくることができる、オリジナルの本として。

それに近づいた時、私は、あの頃と同じ匂いを感じた。コントローラーを握り、VR上で本をつかんだ瞬間、ふっと本の重さを手に感じた。それはVR感度。またの名をファントムセンス。例えば、匂い、匂いを感じ取れるデバイスが無いにも関わらず、あるはずのない匂いなどを感じ取ってしまう現象。これは虚構ではない、確かに実在する。そう思わせる臨場感がなければ、ファントムセンスは発現しない。

もう一度だけ昔話をしよう。私はイベントで同人誌を頒布する他、同じ内容を半額の値段で電子書籍の形態で販売した。時にはネットで無料公開している作品を、イベントで有料頒布することもあった。「半額、あるいは無料なら、より多くの方々が読んでくれるに違いない」と。だが実際にイベントに出てみると、**「お金が掛かっても本の方が良い！」**と大勢の方々が実本を買って下さったので、驚いた。

筆者はTwitterやBoothなどで小説を掲載、頒布しているが、手軽に読めるSNS上やPDFデータよりも、

ずらりと並ぶsun氏の作品。書棚に並ぶとえもいえぬ趣がある

言ノ葉堂に行くのを好む読者の方々も少なくない。VRChatはclusterやNeosVRと比べてユーザー人口が多いが、私以外にも多くの作家がここに作品を掲載している。

言ノ葉堂はパブリックワールドだ。現実世界に喩えると、24時間年中無休で、許可がなくても出入り自由な図書館。それでいて、いくら喋っても咎められないのは、VRならではの強みだろう。最上の読書体験を味わうとするならば、貴方は誰と共にここに訪れたいと思うだろうか？

どこか懐かしさを感じる温もりある店内

ラジオ放送と集会イベント

毎週火曜日は、言ノ葉ラジオが放送される。執筆時点では、毎週火曜日22時から、約1時間ほどの放映スケジュール。Youtubeでの配信となるが、言ノ葉堂の二階で公開収録の形をとるため、直接見に行くのも可能。

ラジオの通常回では①お招きしたゲストとの対談②リスナーの作品の紹介③今週の140字小説の紹介、以上の三つが主なコーナーとなる。

①、②におけるゲストについては、これまで作家以外にも、音楽アーティストや漫画家、その他VRで活動している方々を幅広くお招きしている。店主であり、ラジオパーソナリティーでもあるじむの朔さんは、「**ゲストを随時募集中です！**」とのことだ。VRで精力的にご活動されている御方は、是非参加してみては如何だろうか？

また、③の140字小説についてだが、これは『今週のお題』(例えば「水」「絵」「マスク」など)に沿って、Twitter上で140字以内の小説を応募し、それをラジオ内で紹介する企画となっている。気軽に参加でき、VR初心者にもお勧めの企画だ。

ずらりと並ぶ書棚から本を選ぶのもよい

作家・小説好きとの交流を望む御方の為に、『言ノ葉の集い』を紹介する。こちらは毎週木曜日の22時～23時に開催される。主催のじむの朔さんと予めフレンドになって、時間になったらjoinすれば良い。交友関係を広げたい、自分の作品について相談したいなどと考える方々には、強くお勧めしたい。

最後になるが言ノ葉堂には、(clusterやNeosVRも含む)VRの住人をモチーフにした小説が、多数掲載されている。もしかしたら、貴方が知っている人物の小説も、そこで読めるかも知れない。

(文：sun)

集会イベントの行われる店内併設の交流スペース。ソファやカウンターも設けられ、店内の暖かな雰囲気はそのままに、実に居心地のよい空間となっている。

言の葉堂 (作：じむの朔)
ACCESS in VRChat

店内の階段を上った二階はうってかわってモダンな装いだが、居心地の良さは変わらない。ガラス越しに見下ろす書棚の列もまた味わい深い。

図書Bar『Puella』

本棚に囲まれる

写真／みくにき

記憶の書棚にある手に取れない本

昔読んだことだけは覚えているけれど、表紙や内容を断片的にしか覚えていない。そんな本をずっと探している。

その本は、確か全体的に黄色っぽい表紙の児童文学だった。主人公が家出をして大阪辺りに向かい、やたら個性的なおっちゃんや女の子と出会い、二人とさまざまなことをしているうちに成長して最後は自分の家に帰る話……だったと思う。

いや、しっかり覚えているのは、大阪弁のおっちゃんと女の子が主人公と会話する数ページと、なぜか「緑」という単語に青い傍線が落書きされていて、「どっちだよ」と思わずツッコミを入れてしまった記憶だけだ。家出ものというジャンルにしても、確か主人公が標準語を話し、おっちゃんと女の子は関西弁を話していたように記憶しているからと『ぼくがぼくであること』『鉄塔武蔵野線』『偽原始人』などの小説や、『Stand by Me』などの映画に当時の私がハマっていたから、多分そうだろうという想定も入っている。

もちろん、この本以外にも、そういった「読んだことは覚えているけれど詳しくは覚えていない」本は沢山ある。というか、きっとそういう本の方が多いだろう。でも、『アジアンタムブルー』の「人は一度であった人と二度と別れられない」という台詞のように、一回読んだ本とは別れることができず、どこかで影響を受けているのかなぁ、と思う。

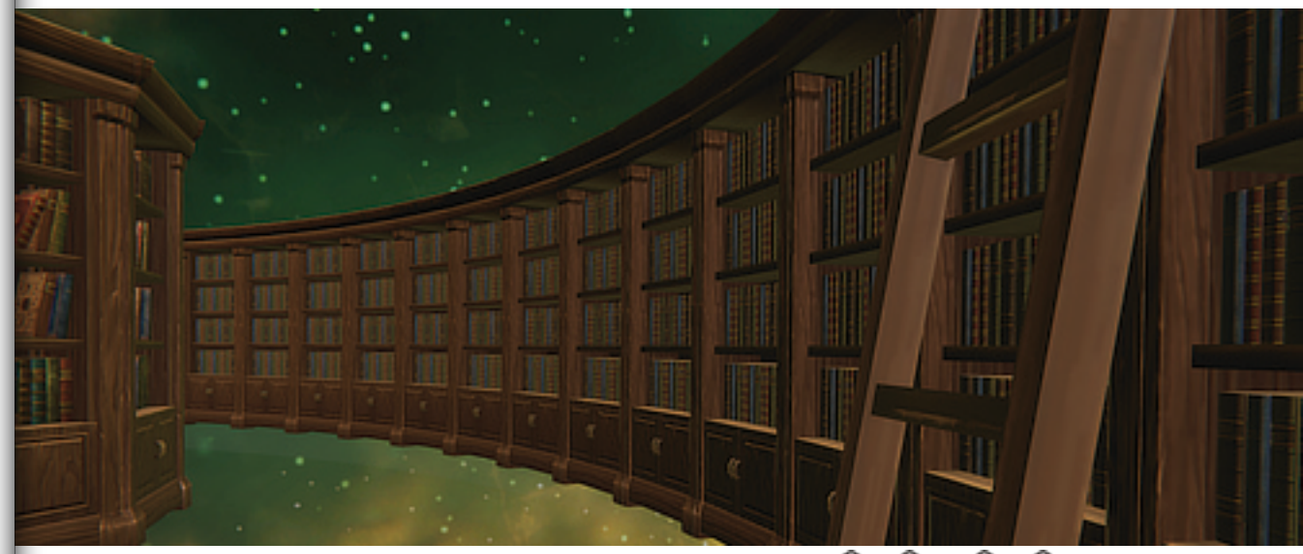
何故こんなことを考え始めたのかというと、さっき私はclusterの**図書Bar『Puella』**に行ってきたからだった。clusterはスマホやデスクトップモードで入れるとはいえ、やはりVR機材を持っている身としては常にVRモードで入りたい。準備を整えいざ入る、全体的にやや黄色みがかった宇宙の中心に一本の樹木があり、その周囲に円形の

バーカウンターが設置されている。さらにカウンターを取り囲むように本棚が置いてある、シンプルな場所であった。

ここの本棚には、一見何冊も本があるように見えるが、ギミックなどは内蔵されておらず、触ることはできない。「本棚に本があるように見えるだけ」という状態なのだ。いわゆる「雰囲気」の場所だなと察し、私はふらふらとこの場所を歩いてみた。そうやって歩いていると、どうにも不思議な気分になる。本棚に本はあるのに、タイトルもわからなければ読めもしない。なんとももどかしい気分になる。

あぁ、そうか。このもどかしい感じは、昔読んだのにタイトルも内容もうっすらとしか覚えていない本を、必死に思いだそうとして、それでもやっぱり思いだせない時と似たような感じなんだ。一度そう思うと、この空間は私自身の脳内を投影したもののように思えてきた。これまで

(上)書架とバーカウンター。どことなく落ち着く雰囲気だ
(下)まるで無限に続くような本棚の壮観な眺め



んできて、詳細は覚えていないけれども自分の内側の書庫にしまわれている本は、こうやって一つの空間を作り上げているのだろうか。そう思えば、たとえ思いだせなくても私のなにかを作るのに役立っているのかもしれない。

それならば、このワールドの中心にある樹木は、きっと私の感性だ。細くて枝ぶりもよくはないけど、無数の本に取り囲まれ、育ててもらい、支えてもらっているんだろうなぁ、と思った。

それなら、樹木の周囲にバーカウンターがあるのは、結局感性を支えるのは食欲ということなのかな？と思い、それはそれで的を得ているような気がして苦笑してしまった。もしかすると、他の読書家の人が入るとまた別の印象を受けるのかもしれない。けれども、『Puella』は単に本の置いてあるバーではなく、何かしらの読書家の脳内を投影したような、不思議な場所だった。

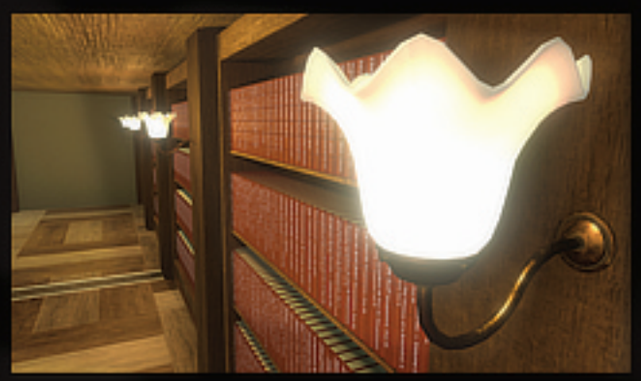
ちなみに、冒頭に挙げたおっちゃんと女の子が出てくる黄色い表紙の本はいまだにわからずじまいである。もしこの文章を読んで、候補が思い浮かんだ人がいたら是非教えてほしい。よろしく、お願いします。

（文：ニッソ編集長）

図書Bar『Puella』（作：suzuhashi）
ACCESS in cluster

NEOS
THE METAVERSE

Neo Library [MMC22]



光と影が織りなす幻想の図書館

写真／みくにき

NEO LIBRARY

ACCESS in NeosVR

Real World BookBar 月に開く

創作と現実が交わる街に

群馬県の県庁所在地前橋市は、萩原朔太郎の生まれ故郷として知られている。それに因んでか、詩、より広範的に言えば言葉を使ったイベントが、市全体で盛んに行われている。

ユニークな取り組みも多々あり、例えば前橋文学館のとあるスペースでQRコードを読み込むと、壁に書かれた文字が空中に飛び出した画像が閲覧できる。一種のXRとも言えるかも知れない。また昨今は、漫画の『月に吠えらんねえ』やゲームの『文豪とアルケミスト』の聖地としても知られている。現実と仮想が融合した『キャラクター』の所縁の地として。

文学とは時に、現実と仮想の仲介人を為すものだ。それは古来より知識人たちの領域とされ、敷居が高いイメージを抱かれがちだが、今回はとある前橋の**ブックバー**を紹介したい。その名は『**月に開く**』、以下は著者がお世話になっている店主さんからご寄稿頂いた文章だ。

読書×バーの醍醐味とは？（月に開く・店主）

”ブックバー“とはその名の通り、読書とドリンクが共にある環境です。

入店後は必ずご注文を取って頂き、ソフトドリンクやお酒を召し上がりながらお過ごしください。

取り扱いジャンルは表情豊かに、ざっくりとですが、千冊以上の蔵書がございます。今日の自分とマッチした一冊とお会いできても素敵ですし、敢えて刺激を受けそうな一冊で冒険をしてみるのも、楽しみ方のひとつです。

貸し出しは実施しておりませんが、「この作品、良いな！」と思う書籍の後日購入の参考にお試し読み、といったご活用方法も。

近隣の書店で購入した新刊を一冊持ち込み、早速開いてみる方もお見掛け致します(真新しい本を、書店で直接手にした時の幸せたるや……)。

ごく一部、販売書籍等もございます。店主が活動エリア(詩朗読等)で知り合った詩人さんの詩集であったり、聴覚から入れる”朗読詩集“CDなど、詩というジャンルの中でも、様

洒脱ながら温かみのある店構え

豊富な蔵書も店内の空気感の一部だ

BookBar
月に開く

ACCESS
群馬県 前橋市
千代田町 3-3-22

営業時間：15:00〜22:00
（定休：月・火・水曜日）

詳しいスケジュールはお店の
Twitterをチェック！

々な販売スタイルがあり、皆様に合ったお品物が見つかると思います。

当店での読書は、強制ではありません。少しお話ししながら飲みにいらしたり、フロートメニューに推しを見つけてくださる方や、小さなアイデアスケッチを進めたり、落ち着いてスケジュールを立てたりと……過ごし方も様々ですよ。

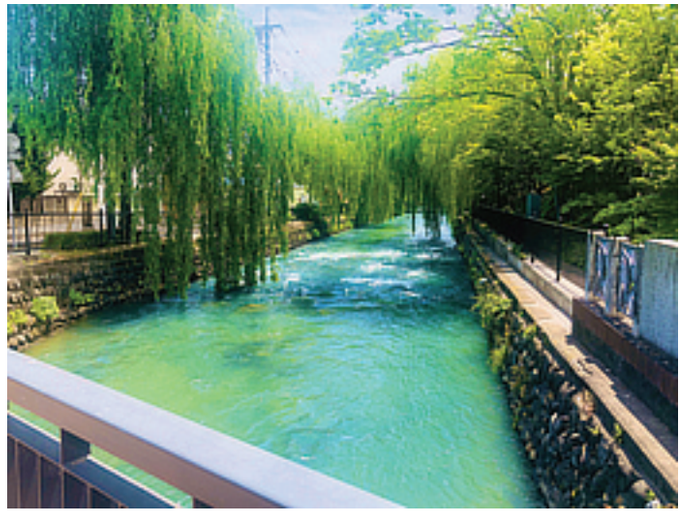
「お店に入るまでに緊張があった」という方からも、入店後は「来て良かった」「この本と出会えて良かった」「詩に触れてみたくなった」というお声を頂いております。店主が稀に黒スーツ出勤なのもいかつい要因かもしれませんが、恐怖要素はゼロですので、迷わずお入りくださいね！？

『月に開く』は、群馬県前橋市…近代詩人の歴史や詩の活動エリアも様々ある、〝水と緑と詩(うた)のまち〟に、店舗がございます。当店への道のりまでにはきっと、文学的な匂いが風や川に運ばれ、インスピレーションが沸き立つ事間違いなしです。

当誌をご覧になり訪れた皆様に、癒しのひと時がありますお待ちしております！

読書が生み出す新しい世界

一人の客として付け加えるのであれば、店主の親しみやすさ、優しさもまた、大きな魅力だと著者は考える。月に開くの店主に憧れて、文学活動を始めた人も少なくない。蔵書の中にはお客様から寄贈されたものもあり、かくいう私も過去の同人誌を置かせて頂いている。時折店内でもイベントが開催されることがあり、文学活動に興味がある御方には特にお勧めしたい。



近くを流れる広瀬川には「詩の道」の碑が佇む

近所には前橋文学館があり、文学フリマをはじめ様々なイベントの会場が近隣に点在する。その為、イベント帰りなどに文学者たちが寄り道するのに絶好の場所であり、各々が胸に抱く心象風景を語り合う貴重な場所でもある。ジャズバーが味わい深い旋律をBGMにするように、居合わせた人物によって齎される言葉を耳で味わいながら飲み物を嗜める。

言葉を通して現実世界から浮上する、千変万化する仮想世界。座したまま海底や宇宙に旅行でき、その体験を空間を超えて共有できる。それは古来より継承されて来た、ある種のメタバースとも言えるのではなかろうか。五感をくすぐり、思うが儘に物語を紡ぎ、やがて時計の針が一人でに動きだす、新たな世界が生み出されるという点において。

（文：sun）

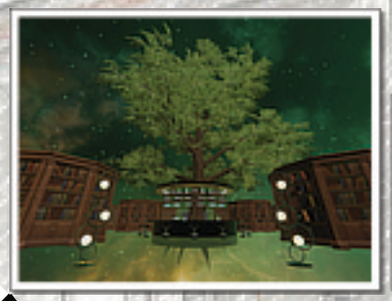
Station

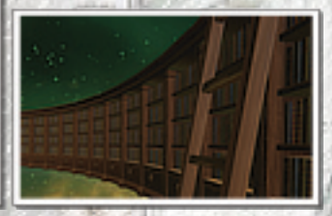
VR CHAT

言ノ葉堂

cluster

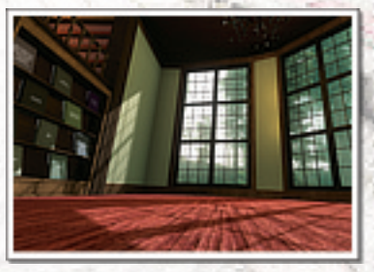
図書Bar『Puella』





NEOS

Neo Library



BookBar『月に開く』

感想などは
#Platform通信欄
へぜひお寄せください！

Platform あとがき Vol.1

ニッソちゃん
編集長・ライター

第2号は数か月後に発車の予定です。今しばらくそれぞれのプラットフォームでお待ちください。お手持ちの切符をなくさないように。

思惟かね
誌面デザイン

やっぱり「新しいこと」のワクワク感は旅も創作も同じですね。文字と写真で旅情を伝えるお手伝いができるよう頑張ります！

sun
ライター

VRという新天地にて、新たな情緒を見出だす旅路は、なんて贅沢なのでしょうか！　かつての同人イベントのように、楽しい思い出が増える一方です！

みくにき
撮影

十数年ぶりに図書館へ行きました。帰り道に沖縄料理のお店があり、立ち寄らなかったことを今更後悔中。

わく
校正

架空の青春アニメの舞台になりそうな場所を旅するのが好きです。普段は現実ばかり旅しているので、VRの旅行も楽しみたいです。

言の葉堂　(VRChat)
執筆：sun
撮影：みくにき

図書Bar『Puella』(cluster)
執筆：ニッソちゃん
撮影：みくにき

Neo Library (NeosVR)
撮影：みくにき

BookBar『月に開く』(Real.W)
執筆：sun
撮影：店主（特別協力）

編集長｜Editor Chief
ニッソちゃん

誌面デザイン｜Graphic Design
思惟かね

校正｜Proofreading
わく

撮影｜Photographer
みくにき（表紙）
わく（巻頭・裏表紙）

Platform Vol.1 夢の中の図書館
発行：Platform編集部　2022/8/7
2022/10/30 第2版

To the next JOURNEY.

2022.8.7

Our Journey Continues...

Platform Vol.1

夢の中の図書館